

授受表現「NP₁にNP₂をもらう」における格助詞 「に」のメカニズム

A Study on the Mechanism of Particle *ni* Used in Benefactive Expressions

范 寛
HAN Kan

提要 许多日语学习者对于授受表达“NP₁にNP₂をもらう”中格助词“に”的用法以及与“から”在使用上的区别抱有疑问。像“私は母にマフラーをもらった（我从母亲那儿得到一条围巾）”这样的句子，“母”除了用“に”表示以外，也经常用格助词“から”来表示。类似的语言现象还有“NP₁にNP₂を借りる”、“NP₁にNP₂を教わる”、“NP₁にVれる・られる”等。回顾前人的研究，就其中格助词“に”的用法而言，可大致分为动作者假说与终点假说两类。本文将分别探讨两种假说的合理性，并将说话者的主观性和场景要素纳入研究视野，深入分析授受表达“NP₁にNP₂をもらう”中格助词“に”的用法、特征以及与“から”在使用上的区别。

山梨（1993：43）曾提出：对同一事实，格助词的差异源自认知的差异。基于此观点，本文认为，当主格名词被认为得到NP₂时，由于NP₁既可以解释为动作者也可以解释为起点，不同的解释方式将决定NP₁后使用哪种格助词；当NP₂不能为主格名词所有，且只能被认为移动到主格名词所在的领域时，NP₁只能用格助词“から”表示。

キーワード：格助詞「に」、意味用法、特徴、使い分け

目次

1. はじめに
2. 格助詞「に」の意味用法の再検討
3. 格助詞「に」の特徴
4. 格助詞「に」と「から」の使い分け
5. おわりに

1. はじめに

授受表現「NP₁にNP₂をもらう」における格助詞「に」はどのような意味用法を持っている

るのか、なぜ格助詞「に」が使えるのか、どのように格助詞「から」と使い分けるのかといった疑問を持っている学習者は多いと思われる。関連した言語現象として、「NP₁にNP₂を借りる」、「NP₁にNP₂を教わる」、「NP₁にVれる・られる」などが挙げられる。格助詞「に」を「から」に変えても、容認できるが、「から」に比べ、「に」の方が自然であると池上(1981:122)が指摘した。だが、実際にNLB 検索システム(NINJAL-LWPforBCCWJ)¹⁾で調査してみると、「から」の方が圧倒的に多く、ヲ格名詞によって格助詞「に」と「から」の使用状態が異なる結果が見られた。本研究は授受表現の中の格助詞に関する先行研究を踏まえ、「NP₁にNP₂をもらう」における格助詞「に」の意味用法と特徴及び「から」との使い分けを解明したい。

2. 格助詞「に」の意味用法の再検討

授受表現「NP₁にNP₂をもらう」における格助詞「に」の意味用法について、すでに多くの研究がなされているが、概ねが動作主説(柴谷 1978、森山 2005 など)と着点説(池上 1981、堀川 1988、菅井 2000 など)の二つに分けられる²⁾。

柴谷(1978:295-304)では、普通の目標を表す「に」は「から」と交替しないが、「太郎が山田先生に本をもらった」の「に」は「から」と交換できるため、目標の「に」ではない。さらに、「山田先生」は動作主と起点の両方の範疇に属しているので、動作主を表す格助詞「に」と起点を表す「から」のどちらも使用可能と主張している。ただし、動作主は有生性の制約を持っているため、無生物の場合は「起点」しか扱わないと論じている。

一方、菅井(2000)では、NP₁が格助詞「に」で表示される時、主格名詞からNP₁への働きかけが含まれ、NP₁は前過程の着点と次過程の起点とも見なされている。すなわち、「NP₁への働きかけ」を前提にしなければ格助詞「に」が使えない。それゆえ、「先生のところに油絵をもらった」が非文であるのは、「先生のところ」が働きかけの対象として解釈できないからと述べている。柴谷説によれば、「先生のところ」は無生物であり、動作主として働くことはないため、格助詞「に」は使用不可ということである。

岸本(2012)では、物理的な移動を表す「受け取る」と比較することにより、「所有の転移」が表されるのは、「もらう」構文で格助詞「に」が使える要因となっていると論じている。

(1a) メアリーがジョン(から/に)本をもらった。 岸本(2012:101)

(1b) メアリーがジョン(から/*に)本を受け取った。 岸本(2012:101)

例(1a)と(1b)が示すように、「NP₁からNP₂を受け取る」の場合、NP₁の後項には「から」しか付加できないのに対して、「もらう」構文の場合、「から」のほか、「に」も使える。以上のような相違は、「もらう」が物理的な移動ではなく、「所有の転移」を表すことに帰属するほかはない³⁾、と岸本(2012)は主張している。その上、「ジョンは銀行にお金を

借りた」のように、「銀行」などの団体・組織は実際には動作を行わないため、格助詞「に」が表示するのは、動作主より、むしろ所有権を譲渡する所有者の方が適切だと述べている。

上述したように、授受表現「NP₁にNP₂をもらう」における「に」の意味用法について論争が紛糾しているため、まずコーパスから格助詞「に」の使用状態を考察した上で、その意味用法を再検討してみたい。

NLB 検索システムを利用し、「もらう」と共起するヲ格名詞の上位30を取り上げ、NP₁に付加した格助詞の使用状態を表1にまとめた。

表1から分かる通り、使用数は格助詞「に」より、「から」の方が多く用いられており、「給料」、「年金」、「賞」、「電話」、「券」、「書」、「メール」、「保険」、「勲章」、「状」、「仕事」、「休暇」、「証」、「名前」などの名詞をNP₂とする場合、NP₁の後項には格助詞「に」は一例も発見されなかった。その一方、格助詞「に」が使える例文を考察してみると、格助詞「に」の使用は、主格名詞がヲ格名詞を所有すると考えられているかどうかと関わるのではないかと思われる。(下記で出典を明記しなかった例文は、現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言版)⁴⁾から抜粋している。)

(2) 昨日、立花則行から電話をもらって、慌てて描いた。

(3) 葬儀社が代行する場合がありますが、病院で死亡したときは、家族が医師から死亡診断書をもらい、忘れずに持ち帰りましょう。

(4) 少し前、くみさんからメールをもらいまして。

(5) 赤塚に金をもらった頼まれたというチンピラが見つかったからだ。

(6) 知り合いの子供(女の子5歳)が、おばあちゃんに誕生日プレゼントをもらって、「ありがとうー!」と、喜んでいたのに、おばあちゃんがいなくなると、「シケたー。パパにもっといいもんもーらお。」と、言っていました。

(7) 国語とは全く関係ないメーカーに内定をもらいました。

格助詞「から」しか使えない場合(以下、A類)では、主格名詞とヲ格名詞の関係(「〇〇と電話」、「家族と死亡診断書」、「〇〇とメール」)は所有関係とは言い難く、ヲ格名詞が表す物が主格名詞の領域に届くというような感じを強くしている。それに対して、例(5)~例(7)のように格助詞「に」が違和感なく用いられる(以下、B類)場合では、主格名詞とNP₂(ヲ格名詞)の関係(「〇〇とお金」、「子供とプレゼント」、「〇〇と内定」)は所有関係と認められる。さらに、例えばヲ格名詞の「返事」の場合では、格助詞「から」の方が頻繁に使われるのは、「返事が届く」の意味情報がよく想起されるからだと思われるが、例(8)のように、格助詞「に」が使えることもある。「他人からの返事を自分の物として所有する」というような考え方も可能であろう。

(8) 部活が終わったばかりの彼にOKの返事をもらって二人で自転車ふたり乗りして帰る。

表 1 格助詞の使用状態

| 順位 | ヲ格名詞 | 「に」の例文数 | 「から」の例文数 | 「に」の比率% |
|----|-------------|---------|----------|---------|
| 1 | 金 | 9 | 35 | 20.45 |
| 2 | 薬 | 2 | 12 | 14.29 |
| 3 | 給料 | 0 | 5 | 0 |
| 4 | 年金 | 0 | 2 | 0 |
| 5 | もの(物) | 3 | 14 | 17.64 |
| 6 | 手紙 | 2 | 22 | 8.33 |
| 7 | 賞 | 0 | 2 | 0 |
| 8 | 電話 | 0 | 31 | 0 |
| 9 | 回答 | 1 | 1 | 50 |
| 10 | 元気 | 7 | 6 | 53.85 |
| 11 | 返事 | 1 | 4 | 20 |
| 12 | プレゼント | 3 | 8 | 27.27 |
| 13 | サイン | 5 | 3 | 62.5 |
| 14 | (整理、商品など) 券 | 0 | 3 | 0 |
| 15 | (診断、証明など) 書 | 0 | 7 | 0 |
| 16 | メール | 0 | 8 | 0 |
| 17 | 保険 | 0 | 1 | 0 |
| 18 | 連絡 | 1 | 5 | 16.67 |
| 19 | 内定 | 3 | 4 | 42.86 |
| 20 | 勲章 | 0 | 1 | 0 |
| 21 | 小遣い | 1 | 6 | 14.29 |
| 22 | (紹介、卒業など) 状 | 0 | 9 | 0 |
| 23 | アドバイス | 2 | 2 | 50 |
| 24 | エネルギー | 1 | 7 | 12.5 |
| 25 | 仕事 | 0 | 3 | 0 |
| 26 | 言葉 | 1 | 4 | 20 |
| 27 | 休暇 | 0 | 2 | 0 |
| 28 | (借用、免許など) 証 | 0 | 2 | 0 |
| 29 | 評価 | 1 | 1 | 50 |
| 30 | 名前 | 0 | 2 | 0 |

「もらう」文では、格助詞「に」の意味用法について、柴谷（1978：295-304）は「動作主」であるというのに対して、岸本（2012）は「所有者」としている。岸本（2012）では、「所有の転移」が格助詞「に」が成立できる要因を主張した上で、（9a）のように、もしNP₁がNP₂（ヲ格名詞）を所有しなければ、「から」のみ使用できるため、ニ格名詞は前所有者である。さらに、例（9b）を取り上げ、起点となる前所有者が所有権を譲渡するのではなく、着点となる所有者が前所有者の同意なしに強制的に取り去ることを意味する場合は、「に」で表示することができないため、ニ格名詞は所有権を譲渡する前所有者と一層明確にした。柴谷（1978：297-304）の「動作主説」に対し、「ジョンは銀行にお金を借りた」のように、実際に動作を行わないため、動作主より、所有者の方が適切だと述べている。

（9a）山田先生は、あの人（*に／から）不当な利益を得ていた。 岸本（2012：107）

（9b）ギャングは、市民（*に／から）お金を奪った。 岸本（2012：107）

A類の「もらう」文とB類の「もらう」文と比較すると、主格名詞がNP₂（ヲ格名詞）を所有することを表す文のみ、格助詞「に」が使用可能なことから見れば、主格名詞とヲ格名詞の所有関係を明確にしたのは有意義であると思われるが、「会社に内定・休暇をもらう」などのように、「会社」のNP₁が「内定・休暇」を所有すると考えにくいいため、格助詞「に」が表示されるのは前所有者であることが十分に適切な言い方とは言えないだろう。主格名詞にある物を所有させる人は、前所有者というより、その物をコントロールできる人ではないかと思われる。（9a）と（9b）に関しては、「山田先生」と「ギャング」は相手が知らないうちに、あるいはコントロールできないうちに「利益」や「お金」を所有することになったため、格助詞「に」が使えないのだろう。また、具体的な動作を行わなくても、主格名詞にある物を所有させることを認めた上で完了した動作は、抽象的な動作であり、広い意味での「動作主」とも言える、と筆者は主張する。

一方、菅井（2000）では、格助詞「に」は「動作主」ではなく、主格からの働きかけの「着点」及び次過程の起点だと主張している。吉田（2008）では、動詞「もらう」が最初に『天草本平家物語』に出現したと提示している（下記例10）。さらにコーパスで調べてみると、例（11）と例（12）のような文が見つかった。例（11）の「もらう」も例（10）と同じく他人に要求・懇願・依頼したりして、ある物を乞うという意味が読み取れる。現代語でも例（12）のような文が存在している。

（10）このやうに日ののどかな時は、磯に出て網人、釣人に手を摺り・膝をかかめて、魚をもらひ。 (天草74-19)

（11）ある冬の半ばに蟻どもあまた穴より五穀を出いて日にさらし、風に吹かするを蟬が来てこれを貰うた。

(12) プライベート中の有名人にサインをもらった事のある方いらっしゃいますか。

上記例(10)～(12)のように、相手に、ある物を乞う場合では、相手に対するお願いという働きが含まれる。だが、「プレゼントをもらう」など、依頼がなくとも、相手が自発的にその物を主格名詞に所有させる場合も多いため、格助詞「に」で表示される時、主格からNP₁への働きかけを含むことが前提になくとも可能であることから、格助詞「に」は必ずしも「着点(相手)」の意味ではないことがわかった。しかも、「市民(*に/から)お金を奪った」のように相手への働きが含まれるとしても、相手の同意を得ずに物を取り去った場合、格助詞「に」は使えないため、「動作主」が格助詞「に」の必要条件であることが明らかになった。

(13) 次男にクリスマスプレゼントをもらった感じです。(動作主)

(14) そこで、両親の入居当日に、兄に保証人のサインをもらって、私のマンションの賃貸契約をすることにした。(相手・動作主)

(15) まだ学生時代、兄嫁が病気だというので医者に薬をもらいに行った帰り、街の入口の橋の近くで狼に出会った。(相手・動作主)

3. 格助詞「に」の特徴

周知の通り、格助詞「に」は常に着点的なものを表示するため、働きの起点的なものも格助詞「に」で表すのは奇妙な感じがする。しかし、柴谷(1978:295-304)と岸本(2012)はなぜ動作主、あるいは所有権を譲渡する所有者が格助詞「に」で表示できるかの理由を明記していなかった。本節では授受表現「NP₁にNP₂をもらう」において、なぜ格助詞「に」が使えるかという理由を論じたい。

(16a) 私はこの本を彼(に/から)もらった。池上(1981:122)

(16b) 私はこの本を彼(*に/から)受け取った。池上(1981:123)

池上(1981:122-123)では、例(16a)は格助詞「に」と「から」は共に容認できるが、例(16b)は「から」しか容認できないという違いが生じる理由は、移動の抽象度の差であると述べている。「受け取る」の移動は具体的である一方、「もらう」は所有の対象となる物の移動で、抽象的であるため、方向性について曖昧さが生じる可能であると述べた。なお、格助詞「に」で起点的なものを表示することを日本語の一つ傾向として、起点の着点による代用ということが日本語でとりわけ際立ち、授受表現だけではなく、受動文にも現れていると指摘した。しかし、もし格助詞「に」の使用が方向性の曖昧さで、起点の着点による代用であれば、B類の「もらう」文では、格助詞「に」の使用傾向が見られるはずである。ところが、実際に表1で示したように、例えば「プレゼントをもらう」の時でも、「に」の使用が「から」より多いという傾向が見られないため、再検討する余地があると思われる。

森山（2005）では、授受表現と受動文の格助詞「に」が表示される参加者は起点性と対峙性を持っていると主張している。対峙性というのは「目標領域の参加者」に対し、主体性を持って対峙する性質である。

(17a) (先生は) 学生に日本語を教える。 森山（2005：1）

(17b) (学生は) 先生に日本語を教わる。 森山（2005：4）

例(17a)の「学生」は動作「教える」の直接的な支配を受けず、「日本語」に比べ、主体性を持ち、「先生」と対峙する。例(17b)の「先生」は能動的参加者なので、主体性を持って「学生」と対峙する。森山（2005）の主張に従えば、相手の「に」と動作主の「に」が共に主体性を持ち、他の領域の参加者対峙できるという立場から、なぜ動作の出発的な動作主が格助詞「に」で表示可能であるかと解釈できると思われる。もらう文「NP₁に NP₂をもらう」では、NP₁は必ずしも実際的な動作を行うことでもなく、NP₂をコントロールできるため、主体性を持っているとも言えるだろう。

本研究は森山（2005）に従うが、例(16b)の「彼」は「私に本を送る」の動作主として捉えるが、格助詞「に」で表示できない理由について、さらに立ち入って説明する必要があるだろう。

(18a) ではマフラーという物が実際に移動するかに関わらず、ジョンはメアリーに対し、マフラーを所有させたという動作を行うため、ジョンは動作主である。ジョンが動作を行うと同時に、相手が物を所有することになった。それゆえ、(18b) では、「ジョンがメアリーにマフラーを所有させた」という事象において、メアリーの立場から生成された文であり、(18a) との違いは異なる立場から同じ事象を語っているということにある。一方、(19a) の「田中さん」は「彼」の動作の目標である。詳しく説明すると、目標に向かって、ある物を移動させるという動作を行うことである。次の段階は移動のルートに従い、物が目標に届いたことである。ただし、「彼はこのメールを田中さんに送ったが、何があったかわからないが、届かなかった」のように、(19a) が成立しても、(19b) が必ず成立するわけではないため、「動作を行う」ことと「物が主格名詞の領域に届く」ことは異なる段階に属していることがわかった⁵⁾。「彼」は前段階では動作主であるが、(19b) の「メールを受け取る」が移動の結果であり、次の段階を語っているので、(19b) の「彼」は動作主ではなく、移動の起点しか扱わない。例(16b)も例(19b)と類似して、動詞「受け取る」が移動の過程だけ表しているため、「に」が使われないのだ。

(18a) ジョンはメアリーにマフラーをあげた。 (作例)

(18b) メアリーはジョンにマフラーをもらった。 (作例)

(19a) 彼はこのメールを田中さんに送った。 (作例)

(19b) 田中さんは彼からメールを受け取った。 (作例)

また、「もらう」文でも、類似点が観察できる。主格名詞がヲ格名詞を所有するのではなく、物の移動を表す時、例 (20) のように、格助詞「から」しか使えない。

(20) 昨日、立花則行から電話をもらって、慌てて描いた。 (例2の再掲)

以上の分析を通して、受動文の動作主がなぜ格助詞「に」を表示できるかが明らかになるだろう。なぜなら、能動文の (21a) と受動文の (21b) は同じことを語るし、(21b) の「ジョン」は動作主として捉えられるが、動作主「ジョン」は被動作主「メアリー」に対し、主体性を持っているからである。

(21a) ジョンはメアリーを褒めた。 (作例)

(21b) メアリーはジョンに褒められた。 (作例)

4. 格助詞「に」と「から」の使い分け

授受表現「NP₁?NP₂をもらう」の後項には、格助詞「に」と「から」がともに使えると考えられているが、第2節の表1が示したように、具体的なデータを分析してみると、その使用条件はヲ格名詞によって異なり、また使用状態が複雑であることがわかった。さらに、格助詞「に」と「から」の使い分けも論述の必要があり、それによっては表1のデータを裏付ける要因もうかがえるようになると思われる。

山梨 (1993) では、例 (22a) と (22b) は真理条件的にはパラフレーズの関係にある。すなわち同じ事実を語っているが、認知の違いによって異なる格助詞が使われると述べている。

(22a) 叔父は癌に倒れた。 山梨 (1993 : 43)

(22b) 叔父は癌で倒れた。 山梨 (1993 : 43)

もらう文「NP₁?NP₂をもらう」では、主格名詞がNP₂を所有すると考えられる時、NP₁の後項の格助詞の違いが、事実に対する認知の違いを特徴づけているのだろう。主格名詞がNP₂を所有すると考えられている時、以下の二つの認知の仕方が可能であると考えられる。

I NP₁が主格名詞に対して、NP₂を所有させるという動作を行う

II NP₁を起点として、NP₂の所有権が主格名詞の領域に届く

よって、見方によっては、NP₁は異なる意味役割を担っている一方、格助詞の選択によって、見方の違いが反映される。もし話者が見方Iをとり、あるいはNP₁の動作主性を強調したければ、(23a)になるが、もし見方IIをとり、あるいはNP₁の起点性を強調したければ、(23b)になるだろう⁶⁾。

(23a) 私は母にマフラーをもらった。 (作例)

(23b) 私は母からマフラーをもらった。 (作例)

また「NP₁?NP₂をもらう」では、NP₂を所有するのではなく、物の移動と考えられている時、事態に対する見方をIIIしか持たないため、例 (24) のように「から」だけ用いられる。

III NP₁を起点として、NP₂が主格名詞の領域に届く

(24) また、米国発明クラブから多数の賞をもらい、米国の雑誌の特集記事のなかで讃えられている。

以上、格助詞「に」と「から」の使い分けに基づき、表1のデータをもう一度考察してみたい。ヲ格名詞によって、格助詞「に」と「から」の使用状態が異なることが明らかである。「給料」、「年金」、「賞」、「電話」、「券」、「書」、「メール」、「保険」、「勲章」、「状」、「仕事」、「休暇」、「証」などのヲ格名詞の場合、NP₁の後項に格助詞「に」が見られないのは、以上のヲ格名詞と、もらう行為が共起する場合、物の移動と考えられているためである。一方、「金」、「物」、「プレゼント」、「サイン」などは「NP₂を所有する」と認識することが可能であるため、格助詞「に」が使えると考えられる。場合によっては、「金、券などが届く」と「金、券などを所有する」のように両方が混在するため、NP₁が「から」で表示されるときは、二つの解釈が生じるはずであろう。また、話者によって、「賞を所有する」も可能であるため、格助詞「に」が完全に成立できないことが断言できない、と筆者は主張したい。

5. おわりに

本研究では、授受表現「NP₁にNP₂をもらう」における格助詞「に」の意味用法と特徴を検討した上で、関連する格助詞「に」と「から」の使い分けを論説した。結論としては、授受表現「NP₁にNP₂をもらう」において格助詞「に」は「動作主」（時には「動作主」と「相手」）を表すものということである。本研究では、文が表される事態において、NP₁が主体性を持つことは、働きの起点的なものを格助詞「に」で表すことができる要因となる結論付ける。また、主格名詞がNP₂を所有すると考えられている時、NP₁を「動作主」と「起点」の両方で解釈できるため、いずれかの見方をとっていることによって、NP₁に異なる格助詞が付加される。一方、NP₂を主格名詞の領域に届くと考えられている時、NP₁が起点の意味役割しか担っていないため、格助詞「から」のみ使用可能であると主張する。

注

- 1) NINJAL-LWPfor BCCWJ (NLB) は、国立国語研究所（以下、国語研）が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）を検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムです。
NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) <<https://nlb.ninjal.ac.jp/>>
- 2) 岸本（2012）では、格助詞「に」が動作主より所有者の方が適切であるという論説もあるが、所有者説を持つ研究者が少ないため、本研究では一つの説としていないが、下文で詳しく論説してみる。

- 3) 物理的な移動の場合、格助詞「に」が使えないため、格助詞「に」は物理的な移動ではない場面で使用することがわかったが、「所有の転移」しか帰属できないという結論を出すのは理由が不十分であると考えられる。
- 4) 現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版 <<https://chunagon.ninjal.ac.jp>>
- 5) 「～を届ける」であれば、物が必ず届くことになる。上述したように、「動作を行う」ことと「物が主格名詞の領域に届く」ことは異なる段階に属しているため、「届ける」は一つの動詞で二つの段階を含む。だが、段階が二つ存在していることそのものは否定できないと主張する。
- 6) ただし、一つの点を注意しておきたい。NP₂の実際的な移動を伴うか否かによって、格助詞「から」の容認性の差が出てくるかということをも更に調査する必要がある。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』、大修館書店：121-170.
- 井島正博 (2006) 「述語と格の構造」『日本語学論集』02、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室：32-70.
- 奥津敬一郎 (1984) 「授受動詞文の構造—日本語 中国語対照研究の試み—」『金田一春彦博士古稀記念論文集 2 言語学編』、三省堂：65-87.
- 岸本秀樹 (2012) 「授受動詞の意味と格」『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』、開拓社：99-111.
- 金珉秀 (2001) 「授受動詞の意味論的研究：『もらう』『買う』『借りる』を中心に」『日本語と日本文学』32、筑波大学国語国文学会：1-17.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』、大修館書店：297-304.
- 菅井三実 (2000) 「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』20 (2)、兵庫教育大学：13-24.
- (2001) 「現代日本語の『二格』に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』21 (2)、兵庫教育大学：13-23.
- (2007) 「格助詞『に』の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育』17、国際交流基金日本語事業部：113-135.
- 竹内義晴 (2003) 「進化と生存という観点からの身体論的意味論：いわゆる授受動詞についての考察つき」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』23、金沢大学文学部：119-144.
- 部田和美 (2009) 「授受動詞『ヤル・クレル・モラウ』文の意味分析—抽象的対象物を含む授受動詞文を中心に—」『言語学論叢』28、筑波大学一般・応用言語学研究室：33-47.
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐる』、くろしお出版：1-38.
- 沼田善子 (1999) 「授受動詞文と対人認知」『日本語学 特集：外界認知と言語』18 (09)、明治書院：46-54.

- 堀川智也 (1988) 「格助詞『ニ』の意味についての一試論」『東京大学言語学論集』88、東京大学文学部言語学研究室：321-333.
- 宮地裕 (1965) 「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」『国語学』63、日本語学会：21-33.
- 森山新 (2005) 「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』5、日本認知言語学会：1-11.
- 山田敏弘 (1999) 「テモラウ受益文の動作主を表すカラ格について」『計量国語学』21 (08)、計量国語学会：361-375.
- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル——格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐる』、くろしお出版：39-66.
- 吉田弥生 (2008) 「『天草本平家物語』の授受動詞：『百二十句本平家物語』との比較」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』19、昭和女子大学：37-48.